



試練を糧に、人との絆で 新事業へもチャレンジ

北上市

有限会社大和製作所

北上市の誘致企業として50年近い歴史を持つ有限会社大和製作所。

多様な金属の精密切削加工で実績を積み重ねてきた同社を率いるのは37歳の福岡弘義社長だ。

リーマンショックや東日本大震災という大きな試練を、若き社長はどうやって乗り切ったのか。展望とともに伺った。

汎用型加工機を駆使し顧客ニーズに対応

「最初から大きな壁にぶつかったことで当社の今があります」。

苦笑いしながら、これまでをそう語る福岡弘義社長。37歳という若さで、北上市に本社工場をおく有限会社大和製作所を経営している。同社はさまざまな金属の精密切削加工に定評があり、取引先は農機具メーカーから自動車部品、半導体製造装置部品や鉄道関連など実に多業種だ。

創業は、戦後間もない昭和22年。福岡社長の祖父が東京で創業し、昭和43年には北上市の誘致企業として現在地へ移転、以来70年余りの歴史を重ねてきた。福岡社長が事業継承を目指し、同社に入社したのは27歳の時だったという。

その2年後に発生したのが、あのリーマンショックである。「売り上げが半減し、つらい時期があった。これを教訓にどんな注文にも対応する体制へと変えていこうと考えました」。

同社はもともとアルミや鋳物等素形材の二次加工を得意としていたが、リーマンショック以降はステンレスやインコネル、ハステロイ等の難削材にも取り

組み、取引先を広げていく。それを可能にしたのが工場設備で、汎用型マシニングセンタや旋盤等加工機械だけで約50台を保有、加工治具も自社で製作していた。これをベースに加工機械ごとの工程分割を行い、素材への対応と納期短縮も可能な生産の仕組みを確立。「新たな投資が出来る状況ではなく現有設備と人材を組み合わせ、『当社では何が出来るか』を提案してきた」と福岡社長。80年代にいち早く3次元測定器を導入し、自動車や農機具メーカーとの取引で長年培ってきた品質管理ノウハウも強みになっていた。

東日本大震災による生産ストップ、円高で大きく変化した事業環境…。32歳で社長に就任した後も試練は続いた。そんな福岡社長を支えたのは「人」。同社は勤続40年以上のベテラン技術者から40代、30代そして技術者候補の20代まで幅広い人材を揃え、あらゆる金属部品製造に対応できる。社内だけではない、会社のある北上市は多くの機械製造企業が立地し、先輩社長たちがいた。

「資金繰りや融資の使い方な

ども一から教えられたし、事業へのアドバイスを受けて動いていく中で業界の幅も増えていった。頼れる先輩がこの地にいることは、私にとって経営上大きな力となっていると思います」。

変化の大きい時代、福岡社長は「新たな分野、聞いたことのないような材料の切削にも機会を頂ければ取り組んでいきたい。」と意気込む。それを可能にするのが、創業以来培ってきた取引先との信頼関係であり、支援者そして従業員存在だ。「人との繋がり」を武器に、これからも同社のチャレンジは続くだろう。



代表取締役
福岡弘義



- | | | |
|---|---|---|
| ① | ② | ④ |
| | ③ | ⑤ |

①5軸マシニングセンタ。同時多面加工に加え納期短縮やコスト削減のメリットがある。②工場は「量産ライン」と「非量産ライン」に分け、10mm弱から350mmまでの部品加工に対応。スペースを効率的に使い、50台の加工機械が並ぶ。③加工機械はいずれも小型。量産に対応し、かつ女性でも操作しやすい職場環境を実現。④品質検査室。来年度、更に高精度な3次元測定器を導入予定。⑤ベテランから若手までが活躍する現場。

✂ 有限会社大和製作所の技術

生産体制の更なる充実を図るために5軸マシニングセンタを導入。同時に5軸が稼働し複雑な形状の切削を行えるため、最小限の加工器具での多面加工が可能となった。最初の仕事は宇宙航空産業関連からの試作品依頼。この過程で蓄積された技術ノウハウは、産業ポンプ関連の部品受注に繋がっていった。難削材切削の課題である刃の持ちに関しても長年の経験を基にベストマッチングを確立した。



いわて産業振興センター活用事例

設備貸与制度をこれまでに5回利用し、マシニングセンタや旋盤等加工機械を導入。今月は新たなCNC旋盤も導入している。ほかセンター主催の「新素材・加工産業化研究会」にも参加している。

企業データ

会社名 有限会社大和製作所
 本社 北上市相去町平林21番地51
 電話 0197-67-3151
 代表者 福岡 弘義

CORPORATE DATA

創業 昭和32年11月(1957)
 従業員 29名
 業種 金属の切削加工